

この季節、神社の近くで華やかな衣装を身につけた子どもたちの姿を見かけることがありますね。七五三はこの年齢まで生き延びることが難しかった時代に始まった民俗行事であることを思うと、子どもたちの成長を祝福する人々の気持ちがとても切実なものであったことが想像されます。子どもたちの健やかな成長は世界共通の願いでもあります。

【問題 8：(児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度) (現代社会と福祉)】

子どもの権利に関する宣言や憲章、条約に関する次の文章を完成させましょう。

20 世紀初頭、スウェーデンの思想家 (1) が「20 世紀を子どもの世紀に」と呼びかけ、世界的な気運が高まる中、国際連盟は 1924 年「児童は危機に際して最優先に救済される」とする「(2) 宣言」を発表した。背景には第一次世界大戦で子どもを悲惨な目に遭わせた反省があった。

日本では児童福祉法の精神をより具体的に表したのものとして、1951 年中央児童福祉審議会などが中心となって「(3) 憲章」を発表した。これは、国際連合が 1959 年に発表する、戦争の犠牲者である子どもが名前や国籍をもつ権利などを謳った「(4) 宣言」よりも早く、世界的にも注目された。

国連総会が 1989 年に採択した「(5) 条約」は、第二次大戦中、ナチスの迫害を受け、子どもたちと共にガス室に送られたユダヤ人医師で孤児院の院長でもあった (6) の意思を受け継ごうと、(7) の代表によって提案された。条約には子どもは受動的権利だけでなく (8) 権利をもつことや意見を表明する権利をもつことが明記された。

正解と解説は最後に記載しています。

■Plus Column

【児童憲章のメロディー】

今から半世紀近く前の話。障害幼児の通園施設に黒いマントをひるがえして、ひとりのおじいさんがやってきました。おじいさんがピアノの前に座り演奏を始めると、それまで思い思いに遊んでいた子どもたちが、自然にピアノの周りに集まってきます。ピアノの音色はなんとも柔らかく、温かく、心地の良いものでした。

小さな子どもたちが、穏やかな表情を浮かべて、明るい曲、静かな曲、激しい曲...それぞれに反応しながら演奏を楽しんでいる姿はなんとも感動的で、おじいさんが魔法使いのように思えたものでした。音楽の持つ力を教えてくれたそのおじいさんが、日本に音楽療法を紹介した加賀谷哲郎という高名な音楽家だと知ったのは、随分後になってからのことです。間違いなく、子どもたちは一流の音楽家の一流の演奏に反応していたのです。

加賀谷先生がピアノを弾きに来ていた幼児施設の壁には、児童憲章の全文が貼られていました...児童は人として尊ばれる、児童は社会の一員として重んぜられる、児童は良い環境のなかで育てられる...戦争の体験を経て産み出された美しい言葉たちは、ピアノの音に包まれて力強く、輝いていました。

戦後の復興を子どもの未来に託そうという気持ちが溢れていた頃のことです。

■Back Number

過去のバックナンバーはこちら→http://www.aigo.or.jp/yoseijo/?page_id=2686

【問題 8 の正解と解説】

子どもに関する宣言などの多くは戦争への反省から生まれました。「条約」には法的拘束力があり、批准した国には国際条約に違反しないような施策が求められるため、その分野の福祉が一層、進められるという力があります。

- (1) エレン・ケイ
- (2) 児童の権利に関する宣言 (ジュネーブ宣言)
- (3) 児童憲章

- (4) 児童権利宣言
- (5) 児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）
- (6) コルチャック
- (7) ポーランド
- (8) 能動的権利

※掲載内容の転載・再配布はご遠慮ください。

※メール内容に対する個別の対応は行っておりません。

※問い合わせ等については社会福祉士養成所ホームページより行えます。

〒105-0013 東京都港区浜松町 2-7-19KDX 浜松町ビル 6F

Copyright2016 YoseijoNewsplus

発信者： 公益財団法人 日本知的障害者福祉協会